

## 第 32 回 2010 年猛暑の夏と山本五十六

---

2010 年の日本列島は全国的に 113 年前中央气象台開設以来はじめてという最高に暑い夏であった。真夏日・猛暑日が長期に亘って連日続き、報道によれば梅雨明けの 7 月 17 日から本文を書いている 9 月 2 日までで熱中症による死亡が 475 名に達した。熱中症にはとくに独り暮らしの高齢者に多いのは悲しいことである。筆者もその期間しばしば頭痛やこむらがりなどを経験したのはその徴候だったのかもしれない。

毎年真夏の季節になると、太平洋戦争末期の沖縄戦や広島・長崎の原爆被災や終戦日のことなどが記憶によみがえるが、ほかにも戦争中に搭乗機が酷暑のジャングルに墜落し戦死した山本五十六海軍元帥(位階勲等は元帥海軍大将)のことに思いおよぶことがある。

山本五十六は、新潟県長岡市出身の大日本帝国海軍最高級の軍人で、第 26・27 代連合艦隊司令長官であった。太平洋戦争開戦時の真珠湾攻撃を立案・実行し、戦局が不利となった 1943 年ラバウルから前線視察のために訪れていたプーゲンビル島上空で乗機一式陸攻を通信文が傍受されて米空軍機に撃墜された。墜落現場では焼け焦げた乗機残骸の近くに原形がよく保たれた長官の遺体があったという。司馬遼太郎著で明治時代の日露戦争を描いた「坂の上の雲」にも日本海海戦での巡洋艦日進の少尉候補生としての山本五十六の記載がある。その生涯は一貫して海軍軍政に携わっており、彼はいわば海洋国日本の命運を握っていた海軍の中枢に深く関わっていた最も有能な軍人であったことは間違いない。

著者は 2005 年 3 月、5 年間にわたる東北厚生年金病院の院長を退任した。病院長就任の当初個人的に立てた目標のひとつは産業医資格の修得であった。そのために必要な医師会主催の講演会や講習会などには度々参加していたが、残念ながら実習単位が不足しており、5 年間の病院長の期間で目的を達することが出来なかった。そのため 2005 年 8 月北九州市の産業医科大学で行われた 6 日間の日本医師会認定産業医基礎研修会に参加した。8 月上旬の小倉は猛暑日が続く、連日終日におよぶ研修は北国育ちの筆者の身にはことさらにこたえたが、今になってみるとその期間のことは楽しい思い出も多い。昼休みの時間に研修会場の建物の周囲の庭や街路樹には連日アブラゼミやツクツクボウシや東北地方には珍しいクマゼミなどの鳴く声が文字通り蝉しぐれのようで、ヒトの話し声も聞きにくいほどであったし、友人と共に見た関門海峡での落日の情景は今でも脳裏に浮かぶ。北九

州市在住のかつて小学校から高校まで同じ学校で学び、同学年の M 君には 6 日間で 2 度も会うことができた。彼のご夫人とも小学校で同級であった。

産業医のための研修講義の中で初めて聴いたのが、人を動かす要諦として引用された「やってみせ、話して聞かせてさせてみせ、ほめてやらねば人は動かず」という山本五十六元帥のたとえであった。

産業医研修に参加した年の 11 月、学会出席した新潟市との往復の新幹線列車の車窓からその出身地である長岡市を眺めながら、山本五十六を偲んだ。太平洋戦争末期長岡市は彼の出身地であるという理由で米軍の大空襲にあったのだという話もある。

山本五十六の語録は、江戸時代中期の出羽国米沢藩第 9 代藩主で名君の誉れの高い上杉鷹山公の「してみせて 言って聞かせて させてみる」の語録の影響を受けているとされているが、呼吸器外科医でもある筆者には北九州市に滞在した時以来忘れられない言葉になった。今思い起こすと呼吸器外科現役の頃は、わが恩師やその後の自分自身も、それらの語録と同じような思いで後輩たちの指導をしていたように思う。

現在勤務している 2009 年 4 月開学の仙台青葉学院短期大学においても、教育に当たってここに述べた山本五十六元師の言葉は、ものの例えとして当てはまる。指導者たるものもまた、

常に研鑽を積まなければならないのは言うまでもない。